

萩原朔太郎記念 水と緑と詩のまち

前橋文学館報

No.40 2014.6



萩原朔太郎賞受賞詩人より

第二回 入沢康夫氏（第十回受賞者）

ブタのレリーフの由来

つい十日ほど前にも、ある知人からこんな質問をもたらった。「前橋の文学館を見学して、とても興味深かった。そのあと、近くの道端にあるあなたの詩碑も見えてきたけれど、詩句に添えてある動物のレリーフがブタだったのは、どうしてなのか。」

ここで知人が「あなたの詩碑」と言っているのは、私が詩集『遐い宴樂』で第十回萩原朔太郎賞を頂き、その翌年（二〇〇三年）の秋に、広瀬川沿いの散歩道に建てられた詩碑のことだ。御承知のように、各回の受賞者にはそれぞれ一基の石碑が新造されるのが恒例だったから、私も受賞者としてその榮に浴したわけである。

ところで、これらの記念詩碑には、おのおのに、俊敏な彫刻家三谷慎氏の制作になるユニークな動物レリーフが必ず付されるのも恒例になっていて、その動物の種類は受賞者の希望によって決められる。そういう

うわけだから、ブタを望んだのは私自身である。三谷氏は見事にそれをかなえて下さった。

と、なると、知人の問いには「なぜブタを希望したのか」を答えねばならない。実は、これについては、かつて宮沢賢治研究会の会誌に簡単に述べたことがあるが、発表場所から言って、ごく限られた方々しか、ご覧になっていないと思われる。（じかに問うてきた知人の場合も、そうだった。）そこで、あらためてここで、今少し詳しく述べさせて頂くことにしたい。

私のブタ好きには、宮沢賢治の作品からの影響が大きく作用している。賢治作品にブタが頻出しているということは全く無く、今思いめぐらして見ても、童話に一篇、文語詩にも一篇といった程度だ。題名をあげれば、童話「フランドン農学校の豚」と文語詩「巨豚」だが、この二篇はいずれも抜群の傑作である。

（作中の豚ではない現実のブタも、きれいに世話されて、きたなくなったり臭くなかったりすればの話だが、おそらく可愛いと思うのだらうけれど……。）

私の観念的ブタ偏愛は、やがて、『ブタ三部作』としてまとまる三篇の詩に結実した。

最初の作は、一九八一年刊の詩集『駱駝譜』巻頭所収の「登龍府」で、その書き出しは、

豚とぼくは語りつつ歩む、

南法朗西は正午の松林を。

である。二つ目は、一九八二年刊の『春の散歩』中の表題作で、冒頭部は、

豚をつれて街を遠望する野道を歩く。

小川はコンクリで固められ、さらさらと、

白濁した液体を流してゐる。

そして、三つ目は二〇〇五年刊の『アルボラーダ』所収の「我らの煉獄」（雑誌初出は二〇〇二年）で、

いまし方 眉間を割られて横たはつた巨豚の

やけにぶよぶよと白い 靈魂を連れて

（いや 当方がいつのまにか連れ出されて）

どこまでも どこまでも 紫がかつた靄のなかを
歩く

と、始まっている。

この三篇に共通しているのは、作品中で「ぼく」が「ブタ（または、その靈魂）」と言葉のやりとりをすることだ。もちろん、全て想像上の出来事である。ついでに一言。最後に引いた拙作の初行末の「巨豚」には、草稿の段階では「ポエジー」とルビが振ってあったのだが、詩集収録段階で、削除された、この処置は正しかったと、今でも思っている。ブタはポエジーの暗喩というには、あまりに生々しい。

（二〇一四・五・一九）

入沢 康夫（いりさわ やすお）

1931年島根県生まれ。東京大学文学部仏文学科卒業、修士課程修了。

筑摩書房、明治学院大、東京工大を経て明治大学教授、2002年定年退職。

大学時代から詩作をはじめ、1955年『倅せそれとも不倅せ』を刊行。1966年『季節についての試論』でH氏賞、1968年『わが出雲・わが鎮魂』で読売文学賞、1983年『死者たちの群がる風景』で高見順賞、1988年『水辺逆旅歌』で藤村記念歷程賞、1994年『漂ふ舟ーわが地獄くだり』で現代詩花椿賞、1998年『入澤康夫＜詩＞集成』『唄ー遠い冬の』で毎日芸術賞、2002年、20冊目の詩集『遐い宴樂』で萩原朔太郎賞受賞。2007年から2010年、萩原朔太郎賞選考委員。

『ネルヴァル全集』や宮沢賢治の研究でも著名。1999年には賢治研究への貢献により宮沢賢治賞を受賞。